# 品川支部

平成30年1月1日発行
〒 141-0022
品川区東五反田1-8-5
℡　3442-7075
1月
天理教品川支部（豊英分教会内）　発行責任者　栗原薫　編集　支部編集部

## 明けまして
## おめでとうございます

## 立教百八十一年

## ☆支部行事のお知らせ

**・支部例会一月三十日（二頁参照）**

**・教区ひのきしん　・神名流し**
正月行事のため一月は共にありませんので二月以降、またよろしくお願いいたします

**・在宅センターひのきしん・婦人会初例会**
一月二十九日(月)午前九時半～十一時、十一時半から水豊田分教会にて初例会

**・三味線・お琴等お稽古受け付けます(随時)**
支部内で三味線・お琴を習ってみたいという方師匠が楽しく楽器の扱い方から教えてくれますので、希望の方個人でもグループでも表紙の豊英分教会まで連絡下さい。

## ☆教務支庁からのお知らせ

**・基礎講座**
一月は十四日(日)です。
前回までに講座を受けられた方は総計で六千六百六十六人になったそうです。
初めてお道のお話を聞く方にも好評な講座ですのでどうぞお薦め下さい。

**・工事のお知らせ**
以前お知らせいたしました、教区神殿屋根の工事と布教の家(荻外荘・下段説明)は杉並区から展示の要請に応え移設の為、解体されます。その日取りと新築の日取りが発表になりました。四月四日の記念祭の後、始めに瓦すげ替え工事から行い、次に建物解体、寄贈後新築工事となります。

2016（平成28）年3月1日に「荻外荘（近衛文麿旧宅）」が国の史跡に指定されました。
現在も教区布教の家として六十年近く使われているが今年夏に杉並区に展示の為解体される

**荻外荘（てきがいそう）とは、**　森泰樹著『杉並風土記』上巻抜粋
戦争当初の総理、近衛文麿の住居として知られているが、元は「大正天皇の侍医入澤博士が大正の初期に買入れしたもので、善福寺川北岸の南斜面の高台で、川の両岸はきれいな田んぼであったと言う。近衛はこの場所を昭和12年の近衛内閣組閣の頃入澤氏から購入したもので、荻外荘は重臣西園寺公望によって名付けられたそうである。」
戦争の裏舞台としての歴史的貴重な建物である。
戦後一時期吉田茂総理が娘和子と共に住んでいた。
その建物の一部は1960年に応接間など邸の一部を豊島区巣鴨の天理教教務支庁の敷地内に移築され、今も残っている。
昭和史の中の近衛文麿を改めて考えて見ようとされる向きには詳しい文献にも触れて頂ければ幸いである。

**時報手配り一月予定**

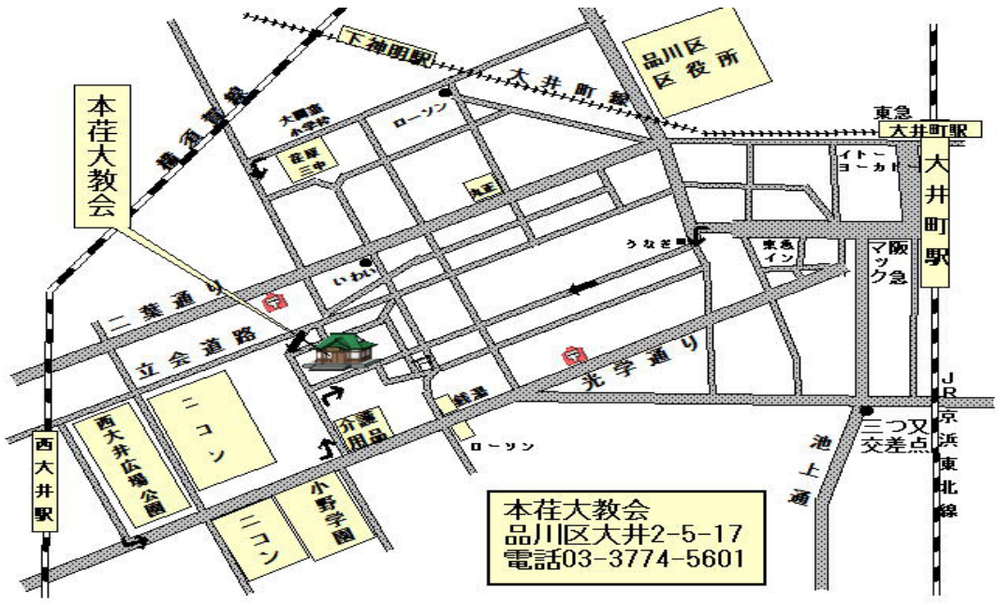
| 拠点教会 | 1日号 | 14日号（7日の合併号） | ２１日号 | ２８日号 |
|---|---|---|---|---|
| 日本橋 | 直　送 | 手配り | 手配り | 直　送 |
| 本　荏 | 直　送 | 手配り | 手配り | 手配り |
| 都　南 | 直　送 | 手配り | 手配り | 直　送 |
| 三ツ木 | 直　送 | 手配り | 手配り | 手配り |
| 水豊田 | 直　送 | 手配り | 手配り | 手配り |

# 品川支部例会

## 平成30年1月30日（火）
## 11時開始
## 場所　本荏大教会

（品川区大井2丁目５-１７）

**内容　おつとめ よろづよ八首 １下り目**
**東京教区、支部連絡事項**
**当該本荏大教会役員 挨拶**
**昼食の用意頂いてます**
**＊各教会の方のほかどなたでも（白足袋ハッピ着用）**






## 教会紹介

**三ツ木分教会元一日**

初代会長山中清平は、神田神保町にて羊羹屋を営んでいた、妻女ヤスの身上により、伊勢にある上級勢山分教会二代会長矢納彦七先生のお手引きを頂き入信する。それまで「世の中万事金の世だ、金さえ貯めておけば」と朝星夜干ろくろく眠りもしないで働いた蓄えを、あちらの病院こちらの湯治場へと使う始末で、そこえ当時押上で布教されていた上級教会長様が同郷というところからお訪ね下され、妻女ヤスに対して神恩について得々とお説き聞かして下さった様子である。しかしながら初代会長は反対しないものの自分から話しを聞かせて頂こうと言う気持ちにならなかったという。しかしお救けにみえると必ずランプ磨き、便所掃除をして帰られる。その姿を見て、自分を含めて世間の人は、金々とあくせく働いて居るばかりなのに、人救けとは言うもののなんと奇特な人だと、そんな天理教とは何かと興味をもったとのこと、時に大正八年である。妻女ヤスは大学病院へ三度も入院した末に、とうとう腹膜炎で死の宣告を受ける時茲に至り「もし神様というものが在るならばお願いしてみよう。神様を拝む道もろくに知らないが、しかし、妻を助けて頂いたら、キット神様をお祀りしよう」と心に誓い、その時初めて手を合わせ祈念させて頂いたとのこと。　そんな時も時、一緒に見舞いに来合わせた出入りの大工に早速話をし「明日から神様をお祀りする教堂を建ててくれ」「旦那、どなたか参る人があるのですか」「とにかく建ててくれ、明日と言う訳にはいかぬから明後日からかかってくれ」と事のつまりを話すると「旦那、そんな妙なことを言わずに奥様は誰の眼にも、もうダメですよ、さあ葬儀屋に連絡しましょう」「とにかく建ててくれ」と一問答して、危篤の妻をそのまま家路につく。思い切る理がいんねん切る理と聞かして頂くが、病院からの帰りがけ新しい下駄の歯が欠け、その時に心に誓ったことは早速に実行させて頂かねばと普請の準備にかかる、奇跡と言うか、丁度家に帰り着いた時に病院からの連絡で、妻の意識が恢復して牛乳も喉をこし、担当医が驚いたたと言う。

そこで約束通り二日後に普請にかかり、十八坪の教堂を突貫工事で一ヶ月後に完成し信者が一人も居ない中に集談所を開設する。

この普請完成と同時に、妻女ヤスの腰が立つという御守護をお見せ頂く。更に信仰が進む中に、参拝者・住み込み人をお与え頂き、神様をお祀りした以上、身上がちな妻や人任せにできない。

羊羹屋（神田神保町）と二足のわらじでは申し訳ないと、幸いに買い手があり、大正十二年七月に店を処分、別科入学の心定めをし、お地場を目指し東京を離れるも、折しも関東大震災が起き、神田一帯と言うよりも東京の市街地は焼土と化した。当然の事ながら自分の処分した店も焼失したわけである。　買主は買ったばかりの店がなくなり災難であるが、こちらは神様みたいなもので、罹災した買主を見舞い、この様な姿を見るにつけ、親神様の大きな思召しを悟らせて頂き、勇み勇んで別科を勉めさせて頂いたという。　ちなみに別科中に甲賀大の山田勘次郎会長に「あんた何でも良いから、国に帰ったら別科生をうんと出して下されや」と声を頂き、自分の年齢（51歳）だけの51名の心定めをするも六十三名からの御守護を頂くに至る。　特記すべき事は、五十三期に十三名の御守護を頂くのである。